

一杯の酒の多相性について

On a Multi-faceted Structure of the Representation of a Cup of Sake

福島宙輝^{*1}

Hiroki Fukushima

^{*1} 九州女子大学

Kyushu Women's University

In this paper, the author proposes a multi-faceted model for making a representation of a cup of Sake. The perceptual domain of taste presents a symbol-grounding problem in which language does not capture the target domain straightforwardly. We suggest that analogy, defined as a process of finding relevance in a metaphorical expression, is a key to handling the problem in the domain of taste.

1. はじめに

1.1 「たそうせい」について

「たそうせい」については複数の表記が可能である。多層性を意図する表記として一定程度の容認度をもつ表記としては、多層性、多相性、重層性、重相性、重奏性、複層性、複相性など¹が考えられる。このうちカバータームはおそらく「多層性」「重層性」であろうと思われる。ここでは、今後の研究に向けてこれらの表記を、それぞれの使用事例を見つつ整理しておきたいと思う。

このような多層性の表記バリエーションは、おそらくそれぞれの筆者にとっては思い入れがあって用いていることと思われるが、その表記意図を明示した例はさほど多くない。

(1) た

対訳としては"multi(ple)"をあらわす「多／重／複」について、それぞれ類表現ではあるが、一般的に理解できそうな区別を示しておく。まず「複」は「単」に対する語であり、何かが「2以上」存在するということを示す。一方「多」は、筆者には3以上を表すように思える。したがって二層の構造をしめすには「複層」を用いることが望ましく、「多層」という容認度が下がるだろう。

「多」と「重」については、「多」がニュートラルに「たくさん」という複数性を示すのに対して、「重」となると層間の関係性を示唆する表現となるだろう。「多層」は関係なくバラバラでも良いが、「重層」となると層の位置関係、上下関係、階層関係など何かしらの関係性を説明することが求められる。したがって「多／重／複」はおそらく順に包含的な関係にあり、単に2以上の複数性をあらわす「複」がもっとも意味が広く、ニュートラルであると思われる。つまりカバータームとしては「複層性」が好ましいように思われるが、おそらく「輻輳」との音の衝突(そして意味も近い)から「複層性」を避けて「重層性」「多層性」が一般的に用いられるのではないかと思う。

(2) そう

「そう」については「層」と「相」の表記が可能である。例外的に[鈴木, 2003]は「重奏性」という表記を用いている。このメタフォリ

カルな表記は、知の性質が冗長で、使えるものはなんでも使うという食欲さを持ち、あるシステムの背後で別のシステムが働いているという点を踏まえたものであり、オーケストラの演奏のように複数のシステムが同時にかつ意味のある全体として機能しているという解釈にたてば、音の響きと漢字の意味が相まって優れた表記に思えてくる。ただしこのニュアンスを保って英語にするのは難しそうである。

「層」と「相」はそれぞれ英語にすると"layer"と"aspect"ということになる。(多面的に近くなるが"multi-faceted"のような表記も可能)。ただし機械学習における layer, あるいは言語学における aspect など、研究ドメインごとに専門用語として規定されている場合があることに注意が必要である。一般的な語義としては、「多層」あるいは「重層」とすると、ある現象を各層に還元して説明したり、層ごとの独立した構造をもっていることが示唆される。なお「多相」は一般的な表記ではないために、この表記を用いるには注釈を付す必要があるだろう。

「層」と「相」を明示的に区別している数少ない事例としては、深谷&田中(1990)を挙げることができる。同書ではとくにコミュニケーションにおける意味の重相性について、

ポール・リクール「発話の意味」と「発話者の意味」の両者は、融合的な関係にある。そこで我々は「重相性」という用語を好んで用いる。なお慣用的には「重層性」と綴られるが、「層」という語は「重ね合わせ」の意味合いが強いため、意味諸相のゲシュタルト的な融合体を協調するため、「重相性」という造語を用いる。

と明示的に区別を行っている。ここでは「相」という表記の選択の背景としてウィトゲンシュタインの「アスペクト盲」の考え方を意識したという(田中氏私信)。深谷&田中ではアスペクトを意味する「相」を用いることであるシステムの全体を意図しつつ、そのある一面を図化し、一方あるアスペクトは地化、盲化されるという意味の重相性を主張している。

2. 味の多面的な表象構成モデル

2.1 一次性

多面表象モデルをくみだすには、その出発点を記号の一次性に置くのがよいだろう。記号の一次性の議論は、端的に言う「対象はどのように現出するか」、そして「対象と自己はどこにあるのか」という問いになるだろう。ただ筆者の主眼は一次的な現出のあとの記号過程、表象構成過程にあるので、ここでは一次的な現出のあり方については稿を改めることとし、一次性を出発点に置く意図を中心に説明するに留める。

連絡先: 福島宙輝, 九州女子大学, 福岡県北九州市八幡西区
自由ヶ丘 1-1, fukushima@kwuc.ac.jp

¹ バリエーションとしては重層性、重相性、重奏性[鈴木 2003], 重創性、多層性、多相性、?多奏性、多創性、多重性、多元性、多面性、複層性、複相性、?複奏性、?複創性、成層性[市川 1989]などが考えられる。英語については稿を改めて検討。

一次性, すなわち対象(の像)がいかに現出するか, 立ち現れるかを認識の出発点に置くことは, 現象論に近いモデルを志向するということである。この点において筆者の味覚表象構成論は, 先験的かつ客観的な対象のあり方を認め, その対象を計測し, その属性に表象を還元しようとする(おおきく言うと自然科学的な)アプローチとはその視座をたがえるものである。

筆者が提案するモデルは, モノの属性あるいは自己の神経パルスに表象を還元しようとする二元論を去り, 対象とのかかわりによって生起し, 一回性を伴って構成される**事態**として表象をとらえるというものである。

「対象と自己はどこにあるのか」という問いは, 要するに一元論に立つか二元論を引き受けるかというもんだいである。大森(1976)は「対象はじかに立ち現れる」として「立ち現れ一元論」を主張するが, 本研究ではそこまで一元論を先鋭化させることは避けようと思う。本研究では自己が(対象をふくむ)環境に融け出しつつ拡張するなかで, 対象との関係性としての表象を構成するという立場をとるので, 自己と明確に対象を切り離れた二元論は否定するが, かといって原理主義的な一元論でもないというのを一応の弁明しておく。ただし表象構成のモデルじたいは一次性から出発することは確かであり, 市川(1990)の主張する「一次的なあらわれののち, 内省によって, そのかかわりの両項として自己と対象が析出する」という考えかたに沿うものとして一次性をあつかいたい。

2.2 仲だちによる関係としての表象構成

一次的立ち現われののちには, 表象構成の段階に入ることとなる。なお, のちには, と記したが, 厳密にいうならば, 一次的立ち現れと表象構成は自覚できるほどその時間差があることはなく, むしろ我々が「立ち現れた事態」として認識しうるのは構成された結果としての表象という事態であり, 一次的立ち現れという現象じたいは内省の後に(内省によって)遡及的に定位されるものであろう。ただしここではモデルの構造を簡明に示すという本節の目的に照らして, 一次的立ち現れののちにくる表象構成のフェイズということで議論を進めていく。

さて, 少なくとも本研究で扱おうとする表象とは, 静的な, 安定した図像のようなものではない。本研究で筆者の考える味覚表象とは, その場限りの, 一回性を前提とした, 関係としての表象のあり方である。

関係としての表象を考えるには, 自らの身¹が世界のなかでどのような位置づけであるかを把握することがまずもって重要である。本研究では現象論的な立場から, 身が環世界[Uexküll, 1998]にたいして拡張し, 融け合うことで対象を自らの系の裡にひき入れるという対象把握の様式をとる。ここにおいて表象とは融け合うような拡張(「融拡」としておく)の結果, その場その瞬間に生起する現れとしての関係である。繰り返しになるが, この認識のあり方は, 表象を自己あるいは対象のどちらかに還元しようとする自然科学的立場へのアンチテーゼである。波を理解するのに海水と風をいくら調べても答えが得られないように, 主体性を伴う身のかかわりとしての表象のあり方を離れては, 表象の本質にたどり着くことはできないだろう。

かかわりとしての表象は, 漫然と酒を呑んでいては得ることは難しい。認知的際立ちという用語を持ち出すかはともかく, 他の知覚領域と異なり, 味わいの感覚は自発的な注意と意識を向け

ないことには言語化をはじめとした表象構成は困難である。すなわち直接的認識が困難なときに, いかにして間接的認識を得るかという問題が, 味覚においては他の知覚領域以上に頻発することとなる。

筆者はこれまでに, 味わいの言語化, とくに動詞概念のような抽象的なイメージを把握する上では, 身体性を帯びた言語媒介的なイメージ図式(中間スキーマ)が必要であることを主張してきた。本研究では, この中間スキーマを言語記号からさらに拡張し, 対象を自らの身と同一の系にひきつけるうえでの接面的媒介としての記号や道具, 用具のあり方を検討する。この媒介は, 筆者の用語では「中間スキーマ」となり, 市川のいう「仲だち」と趣旨を同じくするものである。ただし本稿では概念の乱立を避けるため, 市川の「仲だち」という概念に沿って味覚の間接的認識のあり方を議論する。

さて, 仲だちによる表象構成というと, あたかも仲だちによって構成された表象は「仮の姿」であって, その仮の姿の先に, (仲だちのヴェールを脱いだ)「対象そのもの」があるというような誤解を抱くかもしれない。しかしその考え方はまさに誤解である。多様な仲だちによって構成された多様な表象の錯綜体こそが世界なのであり, 構成の関係を離れた「真の姿」なるものは幻想に過ぎない。この点において, 筆者はセンサによる計測を, 道具的(用具的)な対象理解のひとつの相として表象構成モデルの裡に引き入れることを試みる。

2.3 仲だちの三相

それでは, 間接的な認識を支える仲だちの様相とはいかなるものか。本論考では, 仲だちのありかたとして, 言語的仲だち, 物理的仲だち, 心理的仲だちの三相を操作的に措定し, 各相の性格を検討したい。なお, この三相は独立の認知能力ではなく, 多分に共通する背景をもつ作用の三つのアスペクトであると思われる。

(1) 言語的な仲だち

まず言語的な仲だちは, 端的には言語媒介的な世界把握の様式である。味覚も他の知覚同様, 言語, とりわけ母語の(語や文法上の)分節構造に組み込まれた知覚を余儀なくされる。言語と知覚の関係については多くの議論があり, ここでは微細に検討することは避けるが, 本論で「言語的仲だち」として重視するのは, 前節で検討したような(認知能力としての)メタファを基軸とする作用である。再確認となるが, 重要なのは, メタファは単なる形容方略ではなく, 表象を構成し, 生成する力をもつということである。

(2) 心理的仲だち

心理的仲だちによる表象の構成は, 類推的な作用である。言語は認知的, 心理的な営みであるので, 一般に類推と比喻とされるものが不可分であるように, 心理的仲だちと言語的仲だちのあいだには明確な区分は無いだろう。

本論でもおもに心理的仲だちとして扱うものは, 共感的な類推である。すなわち非言語的な色や形, 音のイメージなどを仲だちとした表象構成である。本稿ではこの類推による表象構成作用を, 「中間参照枠」という概念装置を導入しつつ論じる。その後, 心理的仲だちによる味覚表象構成の事例として音象徴および描画表象を検討する。

(3) 物理的仲だち

物理的仲だちとは, 狭義には身体の拡張としての道具と言いかえることができる。身体の拡張とは「盲人の杖」「外科医のゾンデ」などがよく挙げられる例であるが, (体表ではなく)杖の先で

² 市川は「身体」あるいは「からだ」という言葉が「から(空/殻)」に通じ, モノとしての物理的身体のみを指す二元論的用語であるとして, 主体的なコトとしての身体にたいしては「実(み)」に通じる「身」という用語を好んで用いる。

じかに地面を感じるというように、感覚が道具の先まで延長するというものである。味覚に関する道具をかんがえてみると、ナイフやフォーク、箸などの食器としての道具を用いることでテクスチャなどを捉えることが想定できるだろう。

味覚における道具は、対象や世界の切り取り方を決めるという点で重要である。味覚は外界に開かれた感覚器官ではなく、選択的な性格をもつ。味覚では道具によって対象が切り取られ、感覚器官へと運ばれる。適切な酒器を用いることは、ピントの合った眼鏡を装用するように、酒のかたちを際立たせる。

本研究では、味覚認識における道具的仲だちを、もう少し広義で捉える。具体的には、センサによる対象の計測値を、道具的仲だちの序列に配するということである。計測値に、とかく神話的、絶対的なハード・エヴィデンスとしての地位を認めたがる風潮にあって、仲だちとしての言語による世界認識の相とおなじく、センサデータをわれわれの世界認識の一つの相として、他の表象構成相と相対的な地位におきたいということである。

物理的な仲だちは、道具的、あるいは用具的な媒介物による認識のあり方である。道具と用具の区別は連続的であるが、身体の拡張としての意味合いのつよいものを道具とすることができよう。酒においては酒器が道具として旧くから重んじられている。酒器は単に酒を掬いだすもののみならず、例えばワイングラスに典型的であるが、酒の立ち現われ方そのものを変容させるという意味で重要なことは言を俟たないだろう。筆者を含む味わいの長期言語化実験メンバにおいても酒器を含んだ記述を扱っているが、本研究では酒器の検討は行わないものとし、ここでは、以下に示すような用具としての仲立ち、とりわけセンサによる計測値を多相表象構造のひとつの相としてみなす考えかたを中心に検討する¹。

さて、味覚の言語化や、絵や色、音による表現(共感覚的な実験を含む)を行っている、その言葉や表現の精度あるいは確度のようなものを、味覚センサの数値によって計測するという手法がちらつく。いわば言語記述などのように、確たる分析の手法あるいは分析の基準のないものにハード・エヴィデンスを与えるというものであり、この手法自体は有効なもののように思われる。

しかし、ここで注意すべきなのは、我々の認識あるいは表象はかかわりとして生起するものであって、かかわりを離れた、「客観的」な構造というものは存在し得ないということである。認識の主体としての経験のある一つの相に絶対的に還元しようとする姿勢は、かりそめの明証性と引き換えに、我々の世界理解の様式を貧困化させるだけである。市川はいう、

「赤の知覚は、実は……である」といわれる場合の「本当は」とか、「実は」は、「直接経験に対応する物理・科学的出来事を理論と用具に仲だちされた経験によって記述すれば」という以上の意味をもたない。(市川, 1990, p.106).

したがって本研究では、「科学的な」計測に特権的な地位を与えず、多相的な対象理解の一つの相として考える。自然科学的な計測値は多相的な対象理解のための記述の、あるひとつの相に過ぎず、他の表象相とくらべて特権的な地位や、絶対的な真理性を約束されたものではないということである。

もちろんこれは、自然科学的な用具による対象理解を我々の多様な表象相のなかにおいて相対化することが目的であって、セ

ンサによる計測を代表とする自然科学的なアプローチを真っ向から否定することでは当然ない。筆者が目指すのは、一杯の酒の認識を、自然科学的な用具による計測を含む多様な表象相の重層的な記述としてとらえるあり方である。

2.4 仲だちによる表象構成をささえる中間参照枠構造

先段でも強調したが、とりわけ味わいの認識は、対象としてのものがはっきりと現れていて、それを予め用意された適切な表現で描写するのではない。本研究では、類推による投射的な表象構成を説明するために参照点能力に着目し、中間参照枠という概念装置を新たに導入する。

認知言語学分野では、多様な部分構造を含む概念構造において認知的な際立ちの小さい情報構造にアクセスする際の方略として、参照点構造の利用が指摘されてきた[Langacker Ronald, 1990]。参照点とは、ある事物との心的接触を果たす目的で、別の事物の概念を想起する行為において、最初に想起される構造であり[Langacker, 1993]、この参照点を利用する人間の基本的な能力を参照点能力と呼ぶ。

本稿では、味覚の表現においても、この参照点構造が表現方略として用いられていると考える。ただしこの際参照されるのは特定の味の要素ではなく、例えば「ヨーグルトのような香り」、「色で言うと黄緑色」のように、フルーツや他の食べ物、色、形、音など、他のドメインやモダリティの情報である。こうした味覚表現において類推のソースドメインとして参照され、我々の認識の仲だちとして利用可能な知識の枠組み、情報群を、「参照枠(referential framework)」とする。この参照枠は、言語記号としての抽象性や恣意性をもたない、すなわち身体感覚に動機づけられた知識であるという個人内における有縁性が重要であると思われる。この、感覚と言語を媒介的に接地させる性質(中間性)を踏まえて「中間参照枠(inter referential framework)」と呼称する。

ここでいう中間参照枠は、状況依存的、文脈依存的な性質を持つため厳密に定義することはむずかしいが、以下、考えられるその特徴を示す。

- 中間参照枠は、身体感覚、感覚情報に動機づけられた iconic な認知能力である。仲だちとして参照される領域は、具体的には、心理的な仲だちを中心に列挙すると(マルチモーダルな)イメージ図式、概念メタファ、共感覚、音象徴、色や形による象徴などが含まれる。
- 中間参照枠は、味覚表象のように認知的際立ちの小さい情報にアクセスする際、あるいは知覚できる情報そのものが少なく焦点化が困難な際に、類推表現のソースドメインとして機能する。この際、ソースドメインを経由してターゲットドメインに至るという参照点構造を提供する。
- 何が中間参照枠として利用されるかは、文脈や対象、個人の認知能力に強く依存する。
- 中間参照枠としての知識は、その場限りの表現として、限定目的的に用いられることが多いと思われる。しかし例えば語彙としてのオノマトペのように、より精緻化され概念化あるいは事例化されるとその意味が個人間で共有できる可能性が高まる(社会的な entrenchment [Taylor, 2012])。

3. まとめ:味わいの多相表象構成モデル

ここまで議論してきたように、味覚の認知過程の特性は、記号系の不在と認知能力の不足という二重の制約を抱え、他の感覚を類推的かつトップダウン的に用いるという点にある。こうした制約を含む特性をもつ味覚について、他の感覚領域、言語領域、非言語領域、モノとしての身体、表象された身体、身体の延長と

³ 本項では道具、用具的な仲だちとしてセンサによる計測が取り上げられるが、もちろんセンサによる計測値そのものは我々の(一般的な定義における)表象ではないので、用具的なかわりによる対象理解を多相「表象」のなかにくみこむことは不自然に思えるが、この点は今後モデルを発展させる上での課題とし、いったんは表象相のうちのひとつに組み入れて議論する。

しての器、味わっている環境など、あらゆるものごとを含んだモデルを筆者はこれまでに提案した[Fukushima, 2018]. ただしそのモデルでは、対象の科学としての自然科学的計測を表象モデルのうちに組み入れた形式になっておらず、「現象」から「表象」を生成するという過程とは異なる路線に、「対象」としての理解を配したものとなっている。そこで本研究は、このモデル図を底におきつつ、さらに明瞭なモデルを提案する。(図 1)。

3.1 表象構成:モデルの流れの概説

味覚表象構成の出発点は、記号過程の第一次性、すなわち一杯の酒がどのようにして我々の認識に立ち現れるかということである。図中①で示された部分が立ち現れを示している。本モデルにおいては認識はかかわりとして措定されるので、ここではまだ関係づけられた認識は成立していない。

かかわりとしての認識は、視点(パースペクティブ)(図中②)をおくことによって始めて生起する。本研究であつかう表象は動的なものであり、ある視点をとることによって、能動的に(一度限りの)対象の像を構成するというはたらきである。その際、主体と客体の間の関係性をとりもつものが様々な相の仲だちである。本研究では、仲だちによる認識の原動力として類推的能力、とくに参照点能力を想定し、参照点としてもちいられる情報群を中間参照枠(③)とした。中間参照枠として用いられる仲だちは、決して立ち現われた対象(①)に、その仲だちの図化効果のおよぼ限りの新たな形を与え、仲だちされた表象を構成する(④)。

これが一回の、あるいは一杯の酒の表象構成であり、何度も繰り返すたびに仲だちされた表象はその姿を豊かにする。そしてその複相的な表象の、錯綜体としての重ね合わせ(⑤)が、ある人のある銘柄にたいする理解の総体である。

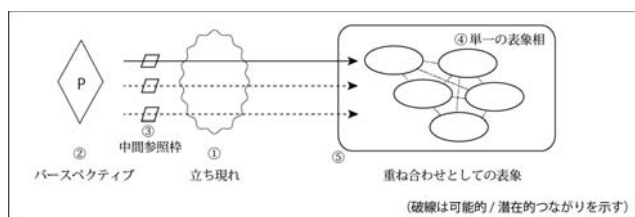


図 1 多相表象構造のモデル図

3.2 多相性:有機的なセミ・ラティス構造としての表象

事態としての表象を考えるとき、事態は視点とのかかわりにおいて生起するものなので、一つのパースペクティブにたつとき(一つの相を中間参照枠として用いるとき)、同時に他の相とおした視点を得ることは困難である。しかしあるアスペクトによる対象把握は常に対象の全体としての理解像(⑤)を更新するため、一杯酒を呑むたびに(一つのアスペクトによる表象構成をするたびに)、その酒の総体としての理解も変容するという構成論的な対象把握の様式になる。

モデル図では各領域は分かれて描かれているが、一度の味わいの経験は多様な表象の総体として(すなわち常に更新される場の状態として)生起する。ごちゃついた全体としての酒の味を受け入れ、流れに身を委ねて酔いを楽しむのも乙なものではあるが、ここでは内省的に、より精緻な表象を構成するはたらきを考えたい。

モデル図においては各相、各ドメインはおのおの独立に存在しているように見える。しかし実際には各ドメインは整然と並んでいたりはしておらず、たとえば音の相の「次の」相や「一つ上の次元の」相を規定することもできない。あるいは日本酒の酸味の表象に S 音(五感の層の音アスペクト)を用いたり、同時にトゲトゲした描画(非言語表象層の描画アスペクト)がアプライされたり

する。すなわち表象は層やアスペクトをまたいで短絡的に相互に関係するし、その関係性は個人に依存する。したがってこの関係性はツリー構造ではなくセミ・ラティス構造[Alexander, 1966]をとっているものと考えられる。

3.3 アスペクト間のつながりの様相

アスペクト間のつながりの様相としては、実際に観測可能な顕在的なつながりのほかに、潜在的なつながりと可能的なつながりがある。これらの三態が分かちがたく連なり行き来するものであることは言を俟たないが、一応の整理を与えるならば、顕在的なつながりとは「この味は色で言うと黄色」と意識できるつながりであって、ここでは内省的に報告可能、あるいは何かしらの外化を伴って観察可能な外的表象を与えられた状態とさしあたって考えておく。

顕在的なつながりは、対象の立ち現われののちに生起するもので、このセミ・ラティス的な多層構造においては、酒を呑むという行為、あるいは酒の立ち現われの以前に、先験的に層間の明確なつながりはない。そこにあるのは潜在的なつながりの可能性だけである。つながりは人の味わうという活動の結果として現れる。つまり表象された表象を階層的に分類することはできるが、しかし表象以前の表象の層は潜在的なつながりの可能性をもったセミ・ラティス的な集合体であって、その総体を記述することはできない。

潜在的なつながりと可能的なつながりの違いは、個人差ということになる。可能的なつながりは可能性であって、例えばヴィゴツキーは「青」と「進む」という感覚が(かれの中では顕在的に)つながっているが、正直に行って筆者にはその感覚はわからない。したがって「青(色ドメイン)」と「進む(動きドメイン?)」はつながる可能性のある「可能的なつながり」ではあるが、筆者にとっては(すくなくとも現在は)潜在的なつながりではない。

Acknowledgments

本論文の一部は、平成 29 年度慶應義塾大学博士論文として発表したものである。

参考文献

- Alexander, C. A city is not a tree. *Design*, 46–55, 1966.
<https://doi.org/10.1017/CBO9781107415324.004>
- Fukushima, H. A Phenomenological Model for Generating the Tasting Description of Japanese Sake. In T. Ogata (Ed.), *Content Generation Through Narrative Communication and Simulation*. IGI Global, 2018.
- Langacker, R. W. Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics (Includes Cognitive Linguistic Bibliography)*, 4(1), 1–38, 1993.
- Langacker Ronald, W. Concept, Image, and Symbol-The Cognitive Basis of Grammar. *Berlin: Mouton de Gruyter*, 1990.
- Taylor, J. R. *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford University Press, 2012.
- Uexküll, J. V. O. N. A stroll through the worlds of animals and men: A picture book of invisible worlds *, 4(1934), 319–391, 1998.
- 市川浩. < 中間者 > の哲学. 岩波書店, 1990.
- 大森荘蔵. 物と心. 東京大学出版会, 1976.
- 鈴木宏昭. 認知の創発的性質. 人工知能学会論文誌, 18(4), 2003.